

三重大学 人文学部

法律経済学科

特殊
講義

「協同組合論」



青木 雅生／三重大学人文学部教授

ガイダンスとイントロダクション

第1回（10月3日）：受講48名（受講生41名・聴講&スタッフ7名）

現代の資本主義社会において活動する組織として、企業や行政などのほかに市民セクターがある。そのひとつが協同組合である。

協同組合論は、市民などの自発性に基づいて組織される協同組合の本来の役割や意義を歴史的な経緯も含め理解し、現代社会の諸問題について考え、未来への課題を共有し、検討していくこと、協同組合と未来を担う学生との関係、地域との関係などの可能性についても検討していく。

【講義の主なポイント】

- ・ 講義の概要や、すすめ方、到達目標などについてガイダンスをおこなった。
- ・ 資本主義経済における企業の競争によって、社会や生活は豊かになってきた。その一方で社会生活の安全安心を脅かす種々の問題が引き起こされている。
- ・ 現代の資本主義社会において、企業と行政では担いきれず、市民の自発的・主体的取り組みによってまかなわれている。その主だったものに協同組合がある。
- ・ 協同組合が、なぜ生まれ存在するのか、経過や現在の活動と課題、未来においてどのような役割が期待されているのかを検討することが必要である。
- ・ 協同組合を一口に言えば「たすけあい」の組織である。資本主義経済の進展とともに貧富の格差が著しくなる中、競争原理とは一線を画しつつ消費者や生産者たちが対抗する組織として協同組合を設立する動きが広がってきた。
- ・ 協同組合は、共同で所有し民主的に管理する事業体を通じ、共通の経済的・社会的・文化的なニーズと願いを満すために自発的に手を結んだ人々の自治的な組織である。
- ・ 企業でも行政でもない存在として組織・団体の中で、協同組合を取り上げ、現代と未来における協同組合の存在意義と役割を考えたい。

第1回講義…受講生の感想レポート（一部抜粋）

Aさん（4年生）

今までの協同組合とは、同じ目的を持った人が集まる組織というイメージだったが、企業、行政から手が届かない社会の諸問題を市民自らが多岐にわたる行動を起こすことによって解決していく存在であると感じた。

Bさん（3年生）

産後で同様に頼れる知り合いがいない、不安を感じている女性、両親が共働きで家で一人ぼっちの子供、何らかの事情で在宅の一部が成立していない者、このような企業や行政からの手助けが届いていない人々を集め、手助けできる市民が話を聞いたり、勉強を教えたりすることで、自助・共助の意識を高める市民ネットワークの存在はとて重要だと感じた。行政のみに任せるのではなく、市民が意識的に自らのために働くことで、相互扶助による社会が生まれる。他人を助けることはつまり自分を助けることになるという話を聞き、ボランティア等に参加する意味が強まった。

Cさん（2年生）

協同組合の歴史において、自助が前提であり相互自助を成し遂げることに意図があり、互いに互いの自立を目指し、互いに寄りかかろうとするのではなく自立した個人を取り戻すことを目指していた。これは、現代の日本でもっと考えるべき、大切なことだと思った。例えば、近年の年金問題、生活保護などの社会保障の問題において、弱者は、国に寄り掛かって支援してもらおう（弱）と考えがちであるが、ただ金銭面で支援するのではなく、弱者が自立して生活できるような工夫を凝らした支援が必要であるのではないかと考えた。

Cさん（3年生）

将来的にJAへの就職を視野に入れており、自カゴ情報を申し込むのは限界があるため、この情報を受けようと思いました。HPを見た程度の知識しか元々ありませんでしたが、協同組合というのは自治や相互扶助の精神に基づいて成り立ってきたものだとわかりました。相互扶助も元々は相互自助によるもので、この考え方に非常に共感しました。

Dさん（2年生）

協同組合とまくと、自分の身近にある大学の生協や、自分の家に食や物等が届くものなどを思い浮かべて「なぜ存在するのか」と考えたことはなかったが、今回の講義を受けて、企業セクターや行政セクターに力や手が届いていないが、放置できない問題が多数あり、その中で支えあう組合として生まれたものだと理解することができた。また自助とまくと、自分一人で自立するイメージを持っていたが、様々な人と助け合い、教えあい尊重しあうながら自立していくという考えに変わった。協同組合は、ただ支えあうものではなく、個人が自立できるように支えあうものなのだと感じた。

Eさん（4年生）

相互自助の「自立を確保する為にはお互いを助けあう」という概念が気に入った。誰かからの一方的な助けを否定するわけではないが、相互自助のほうが長期的に見ればより大きな助けになるかもしれない。何より誰かを助けることは大抵余裕のある人しかできないが、相互に自立を促すことはお互いを選ばずにできると思う。それにより個人を尊重することに繋がるといふのにはよく納得ができた。

Fさん（2年生）

「協同組合」というと、真、先に思い浮かぶのは大学の生協であり、
その生協について、「何のために存在しているのか」、「どのような役割を果たしているのか」
など、深く考えたことはありませんでした。そもそも、協同組合の存在意義について
考えたことがありませんでした。

しかし、今日の講義で、協同組合の在り方とは「相互自助」であり、
そのベースに「個々の尊重」があることを学び、身近な協同組合である
生協についても、これまでに疑問に思っていたことが一つ、解決しました。

その疑問とは、「なぜ売店の商品はコンビニ並みに高いのか」ということですが、
学生向けの売店であるならば、もと安くしていただく方がいいのに、と思っていたことが
何度もありました。

しかしそれも、「相互自助」の観点で、学生が得られる商品を生産する企業にも
配慮しているからだということがわかりました。

このほか、身近な例(生協)が知られると、協同組合についてお興味が
持てました。

Gさん(2年生)

生協など、自分の身近にあって今までたくさん利用してきたのに

こんなことがよくかかっていたことに

私たちが普段利用している大学生協だけでなく、区海福祉に
関するものや、NPOなどと関係しているものもあって

驚きました。自分が知らないだけで、色々な面でも協同組合

というものに繋がっていたんだと思えました。

また、共同、協同、協賛と、同じ読み方で意味が

違うことに驚きました。「協同」の意味は知らなかったのに、

知らず知らずのうちに

以上